

Characteristics, Outcomes, and Risk Factors for Upper Gastrointestinal Bleeding in Inpatients - A Comparison with Outpatients

メタデータ	言語: en 出版者: 公開日: 2023-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 亜也子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00033459

主論文の要約

Characteristics, Outcomes, and Risk Factors for Upper Gastrointestinal Bleeding in Inpatients - A Comparison with Outpatients

(入院中に発症した上部消化管出血の臨床的特徴、予後、リスク因子について)

東京女子医科大学消化器内科学教室

(指導：徳重克年教授) ㊞

小林 亜也子

Internal Medicine 2022 Oct 5. doi:10.2169/internalmedicine.0614-22.

に掲載

【目的】

上部消化管出血は日常診療において頻度の高い緊急疾患である。その臨床所見・治療・転帰などに関する報告は院外で発症した症例を対象としたものが多い。一方、他疾患で入院治療中に発症した出血症例についての知見は多くはない。入院中に発症した上部消化管出血の臨床的特徴およびリスク因子について院外で発症した症例と比較分析し、対策・予防法を明らかにする。

【対象および方法】

2015年1月から2020年6月に、他疾患で入院中に上部消化管出血を発症した症例と院外で発症し緊急入院となった症例、計375症例を対象とした。入院発症群と外来発症群に分け、それぞれの臨床的背景、出血所見、治療法、転帰についての比較検討を行った。また入院発症群において、再出血および死亡のリスク因子を検討するため多変量解析を行った。

【結果】

入院発症群は外来発症群と比較して全身状態が悪く、合併症として慢性心不全、虚血性心疾患、維持透析、悪性腫瘍、感染症を有する患者数が有意に多かった。Proton pump inhibitor (PPI)、抗凝固薬、ステロイドの使用率は有意に

入院発症群に多かった。また入院発症群は、出血発症時の血清アルブミン値、血小板値が有意に低値であった。出血源は胃潰瘍が両群で最も多かったが、食道病変及び十二指腸病変、特に球後部潰瘍は入院発症群で多かった。経過の比較では、再出血率、院内死亡率、出血関連死亡率の全てにおいて入院発症群が有意に高率であった。入院発症群の再出血例は 18 例(18%)、院内死亡例は 17 例(17%)で、多変量解析では再出血リスクとして、Forrest 分類 I 及び II a、維持透析治療、十二指腸出血が、死亡リスクとして、Charlson-comorbidity index (CCI) update score 3 以上と胃潰瘍が抽出された。

【考 察】

入院発症の上部消化管出血は外来発症に比べて再出血率、死亡率ともに高率で、予後が不良であった。入院発症の出血症例は、全身状態や栄養状態の不良例が多く、PPI の予防内服中の症例も多かったことから、一般的な上部消化管出血患者とは病態が異なっていることが示唆された。

【結 論】

入院症例における上部消化管出血に関しては、外来発症の出血とは異なる個々に応じた対策・予防法が必要である。